



企業編



## 大分キヤノン株式会社

安岐町下原710番地  
設立▶1982年2月  
従業員▶約3000名(平成28年12月末現在)

大分キヤノン株式会社は、大分県が進めている

たテクノポリス構想に賛同し、カメラの組立工場として、1982年に安岐町で操業を開始しました。創業当初は、大分キヤノン近郊から採用した第一期生126名と本社から出向してきた約30名で、コンパクトカメラのオートボイの組立を主な業務としていました。1991年には、福島工場から一眼レフカメラの生産の一部も移管されました。さらに、2000年に入ってからデジタルカメラの需要が高まり、大分キヤノンのカメラ生産量が飛躍的に高まってきました。そのため安岐町の工場だけでは生産が間に合わなくなり、2005年には別府湾を隔てた大分市の高台に大分事業所を開設して、二拠点体制となりました。



た。そして、キヤノンのイメージコミュニケーション事業本部の主力生産拠点としてデジタル一眼レフカメラのEOSやビデオカメラ、EFレンズ等の生産を行なうとともに、国内・海外のカメラ・レンズ工場のマザー工場として重要な役割を担うようになりまし。さらに昨年の12月には、デジタルカメラ及び交換レンズの生産技術力を強化するための総合技術棟を完成させました。この総合技術棟の完成により、キヤノン製品の世界に向けたマザー工場として、デジタル一眼レフカメラやビデオカメラ、レンズなどの生産を担うだけでなく、さらにここで開発した技術が、キヤノングループ全体で活かされることも期待されており、キヤノンが世界に展開するものづくり創造拠点としての役割も期待されています。



要になってきました。作業者の職種転換教育に加え、今後は100人規模の雇用を計画しています。



今後、様々な改革を実行し、社員一人一人が目標に向かって努力できる体制を整えます。創業以来培ってきた生産技術、加工技術などの高い技術力や管理力を柱として、さらに知的集約型の総合企業を目指していきます。また、生産体制の自動化が進み、生産に携わる業務は減っていきますが、本社から開発や試作に関わる業務も期待されており、技術部門の人員がますます必要になってきました。

第一次産業編



▲2列目の右から小侯光典さん、息子の俊秀さん

## 株式会社 花未来

武蔵町手野  
設立▶平成23年11月 会員▶10名

創業者の小侯光典さんは、

10年勤めた杵築の会社を退職し、平成2年にストック栽培を始めました。しかし、事業はなかなか軌道に乗らず、農業協同組合や安岐町役場の担当者に相談し、設備投資は大きいものの、1つの品種で1年間作付けでき、出荷作業の機械化が進んでいる輪菊を勧められました。そこで、平成4年に自分が所有する安岐町吉松の農地と借地を合わせた200アールで栽培を始めました。当初は、ビニールハウスが台風時期に飛ばされたり、病気が蔓延して枯れたりすることもありましたが、徐々に規模を拡大させていきました。そして、ビニールハウス6棟の作付面積400アールで栽培するよ



▲芽つみ作業

うになり安定した事業を行えるようになりました。しかし、国東花き部会には、杵築市のような大規模な輪菊農家はおらず、今後国東市の輪菊栽培は衰退していくのではと危惧されていました。そのような中、部会の中でも若手であったことや農業研修を終えた息子の俊秀さんが一緒に栽培をすることから、大分県農業公社のリース方式を利用して、大規模な輪菊栽培施設と株式会社花未来を平成23年11月に設立しました。1ヘクタール以上のまとまった圃場を探していたところ、東部振興局と国東市役所の紹介で、武蔵町手野に建設することができました。個人では年間30万本だったのが、今では90万本を生産するようになりました。



▲選花機に入れる作業



▲被覆をはがす作業

も貢献していきたい」と話していました。



▲選花機から取り出す作業



▲ビニールハウス全景

光典さんは、「輪菊の需要は上がっており、息子と一緒にやっていくにはもう少し規模を大きくしたい、3年後を目途に600アール作付面積を増やし、年間60万本の増産を目指したい」。俊秀さんは、「今までの研修で得た知識があるので、父と栽培方針でぶつかることもありそうです。しかし、農業で一番大事なのは経験なので、多くの経験を積んで早く父に追い付きたい。そして、次の世代の育成に自分

商工会編



## ナカシマメディカルシステムズ株式会社

安岐町塩屋110番地3  
設立▶平成25年11月 従業員▶3名

中島与志樹さんは、関東で医療画像システム

の販売の仕事をしていましたが、平成23年の東日本大震災の影響で仕事が減ったので、独立することになりました。そして、妻のルミ子さんの祖母が住んでいる安岐町で、ナカシマメディカルシステムズ株式会社を設立しました。事務所の中には、福祉用具の販売の店、フランス語で「猫の手」という意味の「Main de chat (マドウチャット)」を設けました。また、福祉用具を展示したスペースの横には、ルミ子さん手作りのベビーグッズを中心にした雑貨を置くことにしました。ルミ子さんはもともと裁縫好きで、自分の子どものベビーグッズを作ったり、友達にもプレ



ゼントしていました。そして、使った感想を基に改良を加えたベビーグッズは、販売を強く要望されるほど反響を得ていました。開店当初、福祉用具の需要は少なかったのですが、ベビーグッズは、手間暇を惜しまずこだわったデザインが好評で、何度洗ってもよれない等の評判が口コミで広まっていきました。それに伴い、内祝などのギフトも売れるようになりました。そこで、福祉用具は注文販売にし、お店にはベビーグッズなどの雑貨を並べるようになりまし。そして、店頭に並んでいた当初100種類のグッズは、今では1000種類まで広がりました。主力の手作りのベビーグッズは、ルミ子さんが作るだけでは注文間に合わなくなり、従業員を雇いました。



内の方たちに利用してもらいたい」と話していました。



与志樹さんは、「自分の本業である医療画像システムの販売では、市内の人と関わることは無いですが、妻の作るベビーグッズなどのおかげで、地域の方々と交流することができるようになったので、これからは親睦を深めていきたい」。ルミ子さんは、「ベビーグッズは、自分で作っているの、さらにお客様の声を反映したものに改良していきたい。そして、もっと多くの市